

国民文化の融解と多文化経験

Multiculturalism and Erosion of Cultural Nationality

升 信夫

桐蔭横浜大学法学部

(2006 年 2 月 28 日 受理)

2005 年の秋、発行部数 15 万というデンマークの新聞が掲載したムハンマドの風刺画は、ムスリム達の怒りに火をつけた。その火は、徐々に燃え広がり、年が明けると、中東の各地でデンマーク大使館が暴徒に襲われるという事態にまで発展した。文化的な差異を背景にするこうした出来事は、ローカル紙の片隅にとどまるものから、世界中のメディアの関心を惹くものまで、頻発している。オーストラリアでは白豪主義の名残がくすぶり、カナダでは、古くは 18 世紀の英仏抗争に由来する対立が残存している。人種の坩堝であるアメリカの毎日が文化的軋轢に満ちていることはいうまでもない。またフランスでは、人々の不安や不満を背景に極右政党である国民戦線が勢力を拡大し、同時に反ユダヤ、反イスラームの言説は極めて繊細な問題となっている。だが、ここ日本では、そうした文化的な対立は、人々の耳目を集める程には、生じていない。カナダで研究生活を送った経験を持つある研究者が、日本の大学生に多文化主義について語るのは非常に難しい、というのも文化的な軋轢が日常のものとして実感できないから、と、昨年末こぼしていた。確かに、世界の他の地域に比べ、厳しく移民を制限している日本では、日常で文化的な軋轢を感じることは殆どない。だから他文化との共存といっても、それは観念的、規範的なものに感じられ、現実的なものには感じられない場合

が多い。

だが、こうした考え方にはその前提の立て方に意味深い錯誤が含まれているように思われる。それは、国民文化と異文化の対立という構図が自明視され、グローバル経済の進展とともに各国の国民文化が融解の一途を辿っていることが見過ごされているということである。確かに、国民文化と異文化の対立と想定される軋轢が世界には数多く存在する。だが、それらの多くは、生活上の不安や不満の捌け口として極右的な思潮により煽られ、或いは自分たちの不遇の全てを文化的差別に起因させ、価値意識、慣習、制度、生活様式、外見などの中のある一部の差異が、包括的な差異にすり替えられて加熱した軋轢だといってよい。例えば 1989 年のフランスのスカーフ事件の場合、高校に通うことを拒まれたムスリムの娘は、ムスリムであること、スカーフを身につけ通学しようとしたことなどを除けば、言葉、趣味など、他の高校生と多くの共通点を持っていた筈である。そして彼女たちが本質的に求めていたのはイスラームの承認ではなく、自分たち自身の存在の承認なのだろう。だが、一方で、移民を排斥することで、失業、貧困などの不満を解消し、ある種のカタルシスを得ようとする動向、他方で、社会からの孤立感を深める中でイスラームにすがりつく男達の、身近な女性へのスカーフ押しつけにより、些細な外見的な差異は、重大な

対立に発展する。

また多文化主義についても、国民文化が異文化をどのように取り込んでいるかを基準として、リベラル多文化主義、コーポレート多文化主義などに分類されるが、そもそも包摂の主体となり得るような一体的な国民文化と呼べるものが、このグローバル化の時代にあって、どれほど健在なのだろうか。⁽¹⁾ 本稿では、グローバル経済の進展と国民文化の融解の中で、多文化をめぐる構造自体が変化していることに焦点をあて論じる。

ところで、国民文化とは、どのような存在なのだろうか。論を進める手がかりとして、対極的な二つの立場を想定してみよう。一方には、国民国家を想像の共同体と捉え、国民文化を、常に恣意的に創造され続けて行くもの、客観的な実体を持たないものとする立場がある。B. アンダーソンの議論がその典型であり、E. ゲルナーの議論もこれに含めることができる。他方には、国民文化は、民族固有の精神なり魂なりを中核として客観的な実体として存在するものだと考える、原初主義、表出的立場、つまりはロマン主義的な立場がある。⁽²⁾ そのどちらの考え方が優位を占めているのかは、それぞれの国民文化の事情により異なるようだ。この日本のように、島国で一民族一国家が連綿と継承されてきたということがやや無批判に受容されている場合は後者のロマン主義的な考え方が受け入れられがちのように思われる。たとえば国学の伝統に依りつつ、奈良平安の以前から「ものあわれ」を基調とする「やまとたましひ」は漢意に覆われつつも連綿として持続しているのだという議論を好む人も少なくないだろう。或いは、溝口健二の「残菊物語」「雨月物語」「近松物語」で描かれた様式美、感性は、純粋に日本的な精神を抜きには成立しないのではないか、川島雄三が落語の世界を下地にしつつ製作した「幕末太陽傳」は日本の庶民の生のありようを集約的に表現した日本的なものであり、日本の諸芸能の根底には日本的

魂があるのではないか、という考え方も十分に成立の余地がある。

ただ、この日本のことは後に触れるとして、ヨーロッパでは、近代の主権国家形成に引き続き国民文化の形成がはかられたと一般に了解されている。そして主権国家が国民国家に変化形成されてゆく19世紀後半から20世紀初頭にかけて、国民文化は自明の存在となった。そうした事情は、例えば『創られた伝統』でも明らかにされている通りである。⁽³⁾ そこで、一般に国民文化は、主権国家の確立を背景として、想像の共同体の中心軸として形作られるという観点から、その生成について確認してみよう。

主権国家体制が近代ヨーロッパでどうして誕生したのかという問題は、いうまでもなく近代史の大問題の中心にあり、定まった説が確定しているわけではない。生産関係、経済諸関係を土台に上部構造としての国家が形成されるという論理が打ち立てられ、批判され、修正され、また論争されるという歴史が続けられてきた。ただ、近年では、戦争が主権国家体制の発展に本質的な寄与をしたという考え方が強まっている。ゾンバルトが資本主義の発展は国家間の戦争によってもたらされた論じたのはすでに20世紀のはじめであり、ほぼ時を同じくしてもO. ヒンツェは、国家の組織形態は、軍隊の組織形態に密接に規定されていると論じている。それから半世紀以上経過して、例えばマクニールは、歴史の進展に戦争が決定的な役割を果たしたと論じ、パーカーは近代の軍事革命がヨーロッパの主権国家体制の確立にどのように寄与したかを明らかにし、ティリーは、戦争が主権国家を増強させ、それが再び戦争をもたらし、さらに主権国家を増強するというスパイラルな関係が存在したと論じ、ポーターは、近代の国家形成過程で、戦争は極めて重要で多方面に及ぶ影響を及ぼしたと説いている。⁽⁴⁾ またヨーロッパでの近代国家形成をテーマとしてオックスフォードより刊行されたシリーズでは、戦争遂行と近代国家形成との関係が、財

政、法、思想など多角的に検討されている。⁽⁵⁾ いずれにせよ、ヨーロッパ近代では、主権国家の中央で権力機構が増強され、領土内隔々への権力の浸透がはかられ、それと即応し、新聞、雑誌などの書かれた文書の流布を媒介として国民文化の土台が築かれ、国民の統合が実現されてゆく。さらに、ナポレオン戦争を契機として戦争の形態が兵員の消耗戦に移行するとき、国民大衆を兵士として戦場に動員する必要が生じ、それを実現するために、教育制度などを梃子として、一層の国民文化の統合が企図されることになった。それまで文明化とは縁遠く、無知なままにしておいた方が統治しやすいと考えられていた一般民衆に対して、教育を与え、開明するという政策転換が図られたのである。つまり近代ヨーロッパを見る限り、国民文化と想定されるものは、原初主義的議論が想定しているのとは異なり、元来は内在する凝集力を持たず、国家的な要請のもとに、外からの力によって形成されてきたといつてよい。⁽⁶⁾

しかし、戦争を必要不可欠の道具として発展した近代の経済システムは、20世紀末に顕著となったグローバル化の過程に突入するにつれ、むしろ戦争を障害とするようになる。『レクサスとオリーブの木』で提示された「黄金のMアーチ理論(マクドナルドの法則)」は、一般には世界の文化をアメリカ化することを肯定したものとあった芳しくない文脈で紹介されることが多いが、一面では、トランスナショナルな企業が戦争を嫌う傾向があることを明確に示している。⁽⁷⁾ 産業のかつての中心であった重工業は、たとえば機関銃、戦車、戦闘機、戦艦などの兵器生産に関わりを持つだけでなく、戦時体制の確立とも調和的でありうる点で、戦争を利益に結びつけることができたが、保険、ファストフード、娯楽などの新たなサービス産業は、戦争が広がり遊興的、奢侈的な消費が減退することは利益には合致しない。だとすれば、そうしたトランスナショナルな企業は、戦争遂行手段という部分では国家機構を支えることはなく、そうし

た企業の活動を中心にグローバル経済が発展するにつれ、国家は国民を統合して戦争に動員する役割を期待されず、管理調整組織としての性格を強めるだろう。街頭に監視カメラが設置されても、それは国民を戦争に誘導することを目的としているわけではない。⁽⁸⁾ かつて存在した、国家による強力な文化統合は、その国が軍事的に自立しているかどうかに関わらず、その根拠を失い、文化的軋轢に際して新自由主義的国家は、多くの場合、むしろ傍観者となるのである。

こうした文化的統合の減退は、統合のための中心組織である教育機関のあり方にも影響を及ぼすことになる。例えばレディングスは、『廃墟の中の大学』で、グローバル化の進展と国民文化の衰退が大学の機能変化に直結することを説いている。⁽⁹⁾ かつて大学は、市民主体を教育するという国家的な使命を担い、それを根拠として国家からの資金提供を受けてきたが、国民文化の象徴としての機能を期待されなくなると、大学は、具体性を欠いた「エクセレンス」を評価基準とされ、さらには国家からの援助を縮減されてゆくことになるのだ。レディングスがこの書物を残してからすでに10年が経過しているが、この日本において、その10年は、レディングスの予言が恐ろしいほどに的中した10年でもあった。国立大学は独立行政法人となり、予算を徐々に削られる運命を宣告されている。そして初等教育では、国語教育の充実ではなく、英語教育の必要性が説かれるようになってきている。教育においても、グローバル化を背景として、文化的な価値よりも経済的な利益が優先され、しかも国家機関が自らそれを先導しようとしているのである。

このようにして、そもそも実体を持たず、国民国家の文化統合政策に支えられて存在してきた国民文化は、グローバル化の進展とともに、文化的統合への外在的な力を失うことになる。それに加えてグローバル化は、ギデンズなど、多くの論者が指摘しているように、従来からの場所と時間の関係を変え、これま

で定まった場所に存在した文化、慣習、価値意識、生産物などを従来の文脈から脱床させ流動化させてしまう。例えば、かつては日本という場所に限定され、そこに同時に並列して存在してきた寿司、空手、桜、日本庭園、相撲などなどは、もはや日本という場所にだけ、相互の内的関連性を予測させるように存在するものではなくなっている。いまや世界の各地に寿司バーが存在し、大相撲の上位力士には外国国籍の力士が並び、空手教室は海外で一層発展し、錦鯉は海外に高値で買取られ、そして東京都心から同じ東京都の小笠原諸島までは、世界のどの主要都市よりも時間がかかるのである。国民文化を構成しているように思われた個々の要素は、グローバル化による時間と場所との関係の変化により、大きく放散しはじめている。

もちろん、こうしたことは、世界的に文化が標準化される、或いはアメリカ化されるということを通じて意味するわけではない。政治権力を背景として形成される国民文化が融解しても、それぞれの伝統文化は、伝統を継承、発展させつつ、存続することができるからである。そしてそれは権力との結びつきを切断され、いわば元々の安住の地に戻ることを意味するにすぎない。ハイパーグローバルの大前研一でさえ、グローバル化の進展とともに、国境が消滅し、各個人がそもそも多様にもっていた好み、価値意識が全面に現れるようになり、グローバル化された世界は、むしろ多様な世界になると論じている。⁽¹⁰⁾ また、例えば、ワトソンが示しているように、超国家企業は、画一的なサービスや製品を提示するのではなく、進出したその地域により適合的なサービス、商品を開発しようとしているし、また同じアメリカテレビ映画「ダラス」に対しても地域によって受け止め方が異なるように、同じサービス、商品であっても、置かれた文化環境によって異なった像を結びつつ受容される。⁽¹¹⁾ アパデュライが論じているように、人、機械類、金銭、イメージ、観念などは、見る視点によって姿を変える視覚

的な構成物であり、まさにそのように実体のないものから想像の世界が形成されている。⁽¹²⁾ つまり、例えば寿司は、日本で暮らす私たちの目に映るものと、アメリカ人に寿司として観念されるもの、オーストリア人に観念されるものでは、それぞれ異なっている可能性があり、日本国籍を持つ人達に寿司の定義を行う特権が付与されるわけではない。実際、インターネットで閲覧できる世界各地の寿司店の写真付きのメニューには、大振りのガラスの器に美しくデコレーションされたにぎり寿司や、トマト、チーズ、マヨネーズなどが包まれた巻きずしを見ることができる。そしてもしその発展形態が、日本的な寿司とあまりに違う状態になれば、やがて自ら別の名称が与えられ、その後は別の独立した文化形態として認識され発展することになるのだ。

グローバル化が進む今日、統合の外在的力を失い、脱床化され、国民文化は融解の道を進まざるを得ない。では、そうした国民文化の融解を、私たちは、この日本において、どのように経験することになるのであろうか。

まず何が日本的なものなのかが不明確になるということをおげることができる。あるいは一般化していえば、ある文化形態に特定の国籍を与え、主権国家とその文化との関係性を明確にすることに意味を見いだせなくなる。しばしば耳にするエピソードだが、親に連れられてはじめてアメリカに出かけた日本人の小学生がアメリカのマクドナルドを見て、アメリカにもマクドナルドがあるんだ、と言ったという。日本の小学生にとっては、子どもの頃から親しんだマクドナルドは、おそらく、うどんや蕎麦よりも日本の日常を特徴づける食べ物なのである。ではマクドナルドが本来はアメリカ的なのだとしたら、日本の資本によって経営され、ライスバーガーなど独特のメニューを開発してきたモスバーガーならば日本的になるのだろうか。

そうした日本的なもの不明確化には、遠い地で結ばれた像が、コミュニケーションの過程で私たちの結ぶ像を変化させ、それが再

び反作用を及ぼすという、スパイラルな関係も大きな影響を及ぼす。客観的な実体という故郷を持たない、そうしたスパイラルな関係は、実は、グローバル化の時代になってはじめて登場したわけではないが、グローバル化と国民文化の融解は、それを加速させ、顕在化させ、結果として、その固有の文化は何なのかを一層不鮮明なものとしてゆくのである。例えば侍や武士のイメージを例にあげてみよう。日本で侍に対して一般に抱かれるイメージは、20世紀では時代劇映画により形成されてきた。しかし時代劇は、もともと荒唐無稽な講談本や歌舞伎に由来しており、忠実に過去の現実の侍を再現することを目指したものではない。そもそも歌舞伎も講談も時代劇も、同時代の観衆を楽しませることを目的としていたのである。そして時代劇のチャンバラは、歌舞伎の立ちまわりを土台とし、大きさに刀を振り回して、いちいち見栄を切ることになる。⁽¹³⁾それが大正時代、怪傑ゾロや三銃士などのアメリカのアクション映画の影響を受け、板東妻三郎や大河内伝次郎らの、より躍動的な立ちまわりが登場した。もちろんそこにも自国の過去をより忠実に再現しようという意図は存在していない。さらに戦後になるとジョン・フォードの「馱馬車」などの西部劇に触発され、日本化された西部劇を目指して黒澤明の「七人の侍」が製作された。黒澤は、三船という歌舞伎の所作に染まっていない役者を使って、躍動感と現実感にあふれた時代劇を目指したのである。おそらく黒澤の場合も、過去の歴史なり、日本の精神なりを再現しようという動機に支えられていたわけではなかった。そして黒澤の作品は海外で高い評価を受け、今度は時代劇が西部劇に影響を及ぼすようにことになる。「七人の侍」は「荒野の七人」として西部劇にリメイクされ、スター・ウォーズの剣劇は明らかにチャンバラを下地に見受けられる。そしてグローバル化が進む近年、製作されたものとして「ラスト・サムライ」や「キル・ビル」などがある。スパイラルな関係の進行

により、何が相互に親和的な日本的諸事象なのかを捉える意識は希薄化し、「キル・ビル」で主人公が日本刀を手にして飛行機で日本に向かうシーンで若者の多くが抱く違和感は、外国人のしかも女性が日本刀を武器として携えていることへの違和感ではなく、日本刀がセキュリティチェックを無事に通過して機内に存在していることに向けられるのだ。

次に日本的文化が各自のアイデンティティの中で存在感を薄めるという現象が生じる。例えば、ロールズの無知のヴェールの罅みにならない、愕然とするようなアメリカ的格差社会を暴くべく、輪廻転生があるとしたらアメリカ人と日本人のどちらに生まれたいか、というレポートを課すと、こちらの意図に反して、次は日本人よりもアメリカ人に生まれたいという答えが数多く寄せられてしまう。それでも庶民の中に持続する道徳心は健在であるという議論もあるだろう。しかし、例えば力のあるものが弱者を助けるといった道徳心は、戦前からの股旅映画で培われてきた側面があり、そういう股旅映画は西部劇を手本としている。だから、無法者の情け心でさえ、どれほどが日本的であるのかを明らかにすることは難しい。戦前の股旅映画でさえそうした状況にある以上、現代で日本的な「たましひ」らしきものを発見しようとすれば本居宣長にさえ想像できないような労苦を伴うのである。

もちろん、感性の水準では、移り変わる季節に美しさを感じるという、もののあわれを知る心を継承しているのではないかという期待もあるだろう。だがそれももろくも裏切られる。四季の中でどれが一番好みかという教師の問いに対し、教室の学生達は、30年前であれば、春と秋がほぼ拮抗しつつもやや春が優勢、そして夏がそれに続き、冬が好きというのは極一部にとどまったものであり、その傾向は10年ほど前までは変わらなかった。しかしメディアでは盛んに桜前線だ、入学、卒業だと、その長所が宣伝されているにもかかわらず、今や春は一番人気がない。もちろ

んその理由は近年増加しつつある花粉症である。十代の若者達にとって春は、もはや、暗くつらい冬が終わり、芽吹き、心躍る季節ではなく、目や鼻の不快に耐えねばならない極めて鬱陶しい季節になっている。それに即応し、意外なことに冬の人気が高まっている。その理由は、花粉がないから。若者達にとり季節は、何かポジティブなものを基準にして臨む対象ではなくなり、不快なものが乏しければよいと思う対象となっている。

こうして日本の場合もまた、想像の共同体である性格は免れ得ず、国民文化の再生は、様々な領域でのグローバル化の進展を抑制しないかぎり、困難なのである。

既に触れたように国民文化の統合性が弱化するれば、様々な個々の芸術、慣習、制度、趣味、価値意識などが雑然と顕在化してくる。サブカルチャーはもはやサブではなく、表舞台に登場するようになり、抑圧、差別されていた文化集団は自らを主張し始める。例えば、日本では同性愛者はこれまで疎んじられてきたが、ハードゲイを公言する芸人が人気を集めるなど、テレビのバラエティ番組ではもはや、そうした存在ではなくなっている。また夫婦別姓の主張、婚外子への差別の解消など、私的な領域に埋没させられ、隠蔽されていた諸問題が噴出して来る。こうした傾向は、異文化間の軋轢に苦しむ欧米でも目にすることができる。

70年代から80年代末までは、異文化間の対立現象は北米、欧州そしてオーストラリアでは、エスニシティという概念で捉えられていた。この概念化の背景には、確固とした国民文化に同化できない文化集団を対象として分析しようという意図が存在していた。しかし冷戦構造が瓦解してゆく90年頃から、エスニシティは、多文化主義(multiculturalism)という言葉で徐々に置き換えられるようになってくる。そしてその過程で、多文化の中には、移民の結果生じる文化的な差異だけでなく、フェミニスト、同性愛者など、ホスト国の文化に帰属しながらも、そこでは抑圧対

象となっていた文化集団が加えられるようになってきた。つまり、異文化との軋轢を抱える地域でも、多文化という言葉には、かつての様々なサブカルチャーが含意されるようになってきている。実際、ヨーロッパの極右がターゲットとするのは、移民だけではなく、同性愛者やホームレスまでが含まれており、1999年ロンドンでは、ソーホー地区のゲイバーが極右の爆弾テロを受け、多数の死傷者がでて

いる。グローバル化に伴う社会経済の急激な変化の中で、失業、貧困に苦しむ者達の中に、その捌け口をマイノリティに向ける者達が現れ、また文化、道徳の急変に遭遇して、アイデンティティの揺らぎや将来に向けての孤立感の危惧を覚えるもの達の中に、若者文化、マイノリティの文化、かつてのサブカルチャーに嫌悪感を持ち、それを行動に現すものがでてくる。他方で、思うようにならない日常に苛立ちを募らせ、社会が自分たちを承認していないと感じる若者達は、様々な場面をとらえて伝統文化やホスト国の文化に嘔みつこうとする。過激なイスラーム思想に加担するものの中には、ヨーロッパに移民し、そこで生まれ、そこで育ち、その国の言葉を話す二世が少なくない。こうした対立は、国民文化と異文化の本質的な差異に由来する対立ではない。むしろ、現状への不満が、表面的でわかりやすい文化的差異に転化されているだけなのであり、この衝突は、いわば不安に満ち、急激に変化する社会の中での苦痛の叫びの衝突とあってよい。

そして日本のように、移民を制限しているため、異文化との目立った軋轢を欠く場合には、フェミニズム運動、同性愛者、新興宗教組織などと、保守主義的思潮との間に、その衝突は生じる。女系天皇を認めるかという問題も、その一つの表れとあってよいだろう。⁽¹⁾

(1) リベラル多元主義、コーポレイト多元主義については、Gordon, Milton M., *The Scope of Sociology*, Oxford University Press, 1988。またこれらの理論の紹介、説明については、関

- 根政美『多文化主義社会の到来』（朝日選書、2000）。
- (2) 吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学』（名古屋大学出版会、2002）。吉野はA. D. スミスの議論を引照しつつ、民族が耐久的な絆として機能する説明方法として原初主義、境界主義をあげ、民族がどうして活性化してゆくのかについて表出主義と手段主義をあげている。本稿は、吉野の整理に従えば、現状の文化的軋轢は、原初主義、表出主義では説明できないという立場をとる。
- (3) ホブズボウム『創られた伝統』（紀伊國屋書店、1992）
- (4) マクニール『戦争の世界史』刀水書房、2002. Parker, Geoffrey, *The Military Revolution : Military Innovation and the Rise of the West, 1500-1800*, Cambridge, 1996. Tilly, Charles, *Coercion, Capital, and European States*, Blackwell, 1990. Porter, Bruce D., *War and the Rise of the State*, Free press, 1994.
- (5) Bonmey, Richard, *Economic Systems and state Finance* Oxford U.P., 1995.
- (6) 国民文化の成立以前には、文化が何も存在しなかったという含意ではない。常に人間は、広義での文化とともにあったと言い得るからである。ここで国民文化の成立というのは、国民の一部の生活様式、価値意識、慣習、文化財などを、国民すべてに共通するものとして、国家が、権力的、政策的に国民すべてに修得させるようになったことを意味している。従って、国民文化の融解とは、文化がなくなることを意味するのではなく、それぞれの文化形態が主権国家との権力的な関係性を断つことを意味している。
- (7) トーマス・フリードマン『レクサスとオリーブの木』（草思社、2000）。この中でフリードマンは、マクドナルドが進出した国同士は戦争することがない、という経験則をあげ、それを黄金のMアーチ理論と呼んでいる。
- (8) 国家が国民の文化的統合を放棄して国民文化が融解するとしても、それは国家権力が中心的な抑圧装置としての機能を放棄することを含意するわけではない。
- (9) レディングス『廃墟のなかの大学』（法政大学出版社、2000）
- (10) Ohmae, Kenichi, *the Borderless World*, Harper Bussiness, 1991, p.192.
- (11) Watson, James L., *Golden Arches East*, Stanford, 1997.
- (12) Appadurai, Arjun, *Modernity at Large*, University of Minnesota, 1996.
- (13) 佐藤忠男『チャンバラ映画史』（羽賀書店、1972）
- (14) 国民文化が融解しつつある時、天皇制度が男系か女系かという問題は、多くの国民にとっては関心度の高い問題にはなりにくい。しかし、一部の政治家、メディアが様々な不満を集約しつつ、この問題に向かう場合には、重大な軋轢をうむ問題に発展する可能性を孕んでいる。